

Title	言葉と沈黙：ブランシヨとメル口=ボンテイ
Sub Title	
Author	鳥居, 珠江(Torii, Tamae)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2006
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.11, (2006.) ,p.48- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20060000-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

言葉と沈黙

— ブランショとメルロ＝ポンティ —

鳥居珠江

言葉 (parole) が内に持つ沈黙 (silence) について触れた思索家は少なくない。「言葉がその内部に沈黙を持つ」という矛盾した考えが、もしすでに私達に大きな矛盾を感じさせないとすれば、それは私達が日常の中で、ときに言葉の無力さを感じるからだろう。言葉は語るものであるのに、それが語りつつ黙り込むことがあるとすれば…。しかし、たとえばブランショやメルロ＝ポンティが言葉の沈黙について言及するとき、それは言葉の非力さを嘆いての文脈ではない。彼らが言う「言葉の沈黙」は、言葉が密かに持つ類まれな力のことだ。とはいえ私達がときに感じる言葉の沈黙と、哲学的思索が言及する「言葉の沈黙」は同じ根から生まれている。それら沈黙の根にあるものは、語と意味、言語と本質のつながりに対する疑念、さらには、本質そのものに対する不安だろう。

ブランショは「エトレの逆説」というテキストの中で、言葉の沈黙について思索を巡らせている。このテキストでブランショはメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』を引用し、メルロ＝ポンティの「言葉の沈黙」についての考察が文学的次元にまで達していると指摘する¹。『知覚の現象学』では、人間の身体が世界を知覚し世界を形成する様が描かれており、身体についての哲学的分析から考察が始まっているが、ブランショが引用した箇所ではメルロ＝ポンティの話はさらに広げられ、身体から発される言葉にまで思索が進められている。ブランショが注目したのは、「言葉のざわめきの下に (sous le

¹ Le paradoxe d'Aytré, Maurice Blanchot, *La part du feu*, Gallimard, 1949, (以下 PF) p.72

bruit des paroles) 本源的な沈黙 (le silence primordial)」があることをメルロ=ポンティがほのめかした部分だ¹。

この二人の思索家が、言葉が本源的に沈黙を持ち、ときに沈黙を顕わにすると考えるとき、彼らの言う「沈黙」とは、言葉自体が持つ力にほかならない。言葉の沈黙に目を向けることは、「本質」への気づきを意味する。だが同じ国、同じ時代を生きたこれら二人の思索家が言及する「言葉の沈黙」は同じ「本質」を問題にしているのだろうか。ブランショとメルロ=ポンティの言葉 (parole) 観について比較してみたい。

1 メルロ=ポンティにおける言葉

現象から出発して世界を分析しようという視点に立つ現象学は、そもそも言葉に先立つものとしてアприオリなアイデアを想定する古典的な考え方とは相容れない。現象学の立場に立つメルロ=ポンティのものの見方はフッサールやハイデガーのものと同じく、アприオリな本質をまずは括弧に入れ、知覚される現象を分析することから世界を叙述する姿勢をとる。そのような姿勢で考える場合、言葉というものに対する考え方も、従来の方とは違うものになる。つまり現象学的に考えるとき、言葉はアприオリなアイデアに従属する副次的な位置から解放され、逆に言葉そのものに何らかの力が見出されることになる。現象学以後の言葉 (parole) についての考え方には、言葉自体に備わる力がどのようなものであるか、その内容を明らかにしようとする方向性が認められる。

メルロ=ポンティもまた、言葉は思惟 (pensée) を単に代弁するものではない、という立場を取っている²。彼は言う、「言葉は言葉を語るものにとつ

¹ Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, (以下 PP) p.214

² 本稿ではメルロ=ポンティの前期作品『知覚の現象学』に著されている言語論を中心に論を進めることにする。ブランショが「エトレの逆説」の中で言及している文が上記作品のものだからだ。ただしメルロ=ポンティのその後の作品における言語観が、前期に比べて大きく変更されているとは思われないため、適

て、すでに出来上がっている思惟 (*pensée*) を翻訳するのではなく、それを完成するものだ¹。ここには言葉が、積極的に発揮する力を持つことが示されている。メルロ=ポンティの考えによると、言葉はそれに先立つ内容を二次的に伝達するのではなく、言葉自身が内容を作る力を持つという。メルロ=ポンティによると、言葉 (*parole*) として発されるそれぞれの語は、何らかの対象や意味の記号 (*signe*) なのではない。また、言葉は思惟の記号 (*le signe de la pensée*) なのでもない²。語は言葉として発される (あるいは書かれる) ことによって、全体としてそのつど意味を作るのだという。

メルロ=ポンティのここまでの考え方は、現代的な言葉についての考え方と轍を一にしているように思われる。そこには、ギリシャに起源を持つ形而上学的な言葉観から解放され、アイデアへの従属から自由になった言葉 (*parole*) の姿がうかがわれる。ところでメルロ=ポンティの考え方の中で特異なところは、発される言葉 (*parole*) を身体の身振り (*geste*) のひとつである点だ³。メルロ=ポンティはこう言っている。「言葉は一つの身振りであり、その意味するところは一つの世界である⁴。」これは何を意味しているのだろうか。

メルロ=ポンティは彼の現象学の根幹として、身体が果たす役割に重きを置いた。現象を知覚する身体は世界の始まりであり、世界が開く場所でもある。メルロ=ポンティによると、身体は事物を知覚することによって世界自体を形成するのだ。現象学的な視点における「世界」とは、自己と切り離された形で措定される外界ではなく、自己にとってここに開かれた世界のことである。ハイデガーにとって、人が「存在する」とは「世界内に存在するこ

宜、中後期の作品も参照することとする。

¹ *PP*, p.207

² *Ibid.*, p.211

³ Cf. « La parole est un véritable geste et elle contient son sens comme le geste contient le sien. » (*PP*, p.214)

⁴ « La parole est un geste et sa signification un monde. » (*PP*, p.214)

と (être-au-monde)」だったが¹、メルロ=ポンティにとっても、世界とは客観的世界ではなく、世界内存在 (être-au-monde) として人が存在する場であると考えてよいだろう。ただしハイデガーと異なる点は、メルロ=ポンティは、人間が世界内存在たり得る第一の要件として身体の役割を考える点だ。メルロ=ポンティでは、身体が知覚するというを通してのみ、自己は世界に存在することが可能になる。もちろんハイデガーにとっても、身体を全く持たずして世界内に存在することは難しいと思われる。たとえば用具的存在者の存在を把握するとき(たとえばハンマーという存在者の存在を把握するとき)、身体を一切介在させずに把握するというわけにはいかないだろう。なぜならハンマーはその存在が、それを使ってものを叩くという体の動作と関わっているからだ。しかしながらハイデガーにとって存在者の存在は、ただ私の身体が存在者を知覚することによって確立するわけではない。ハイデガーにとっては、語 (mot) があってはじめて存在が確立する。また言葉 (parole) があってはじめて世界が世界であり得るのである。それに対してメルロ=ポンティでは、世界の成立要件は語でも言葉でもなく、身体である。そして言葉 (parole) は身体の身振りのひとつであるというのだ。

では、身体の身振り (geste) とは何なのか。メルロ=ポンティによると、身体は知覚することを通して私達を世界内存在にする(私達に世界を持たせる)だけではなく、身体は「表出空間」(espace expressif) であるとみなされており、表現を通して世界に関わっていくとされる。身体は動作や身振りによって何かを表現するのである。身体が示すそれぞれの身振りは意味を内に含んでおり、身振りを通して表現された「意味」は他者によって受け取られる。ところでメルロ=ポンティによると、身体の身振りが持つ「意味」は、「もの」を手渡すように他者に受け渡されるのではない。身振りの持つ「意味」は他者によって「了解 (comprendre)」されるという。つまり身振りの「意味」はアプリアリに決定されたものではなく、受け取り手が了解するこ

¹ Martin Heidegger, *Etre et Temps*, Authentic, 1985, traduit du texte original allemand publié en 1927

とよってはじめて、その内容が決定することになる。メルロ=ポンティにおいて身体が芸術作品と似ているとされるのは、この点においてである。「身体が比較され得るのは、物理的な物体に対してではなく、むしろ芸術作品に対してだ¹。」身体も芸術作品も、その身振り（*geste*）を通して何かを表現するのだが、表現されたものの内容は他者の了解に委ねられている。そして身体も芸術作品も、全体的にはある世界（*monde*）を表現しているとされる。

「言葉は一つの身振りであり、その意味するところは一つの世界である。」とメルロ=ポンティは言うが、この「世界」とは、人間が世界内存在であるという意味での「世界」であろうと思われる²。つまり身体を媒介にしてその人に開かれている世界が、その人の言葉という身振りから現われ出てくるというわけだ。もちろんそれぞれの言葉には、第一の層として通常的な意味が認められる。日常の会話であれば「今日は天気がよい」とか、小説であれば主人公の冒険の顛末であつたりするだろう。しかし言葉を「身振り」としてメルロ=ポンティが捉える場合、意味の第一の層の下には、言葉全体によって表現される真の「意味」が認められる。それが「世界」であり、メルロ=ポンティの別の言い方を使うと、それは「実存的意味（*signification existentielle*）」ということになる。メルロ=ポンティは言っている、「我々は言葉の概念的意味の下に、ある実存的意味を見出す³」と。

¹ « Ce n'est pas à l'objet physique que le corps peut être comparé, mais plutôt à l'œuvre d'art. » (*PP*, p.176)

² 中期の草稿集である『世界の散文』（*La prose du monde*, Maurice Merleau-Ponty, Gallimard, 1969, p.181）では、「言葉はあらゆる身振りのうちのひとつではないが、身体が世界内存在の媒体であるように、言葉は真理へ向かう我々の運動の媒体なのだ」（« la parole n'est pas un geste parmi tous les gestes, mais la parole est le véhicule de notre mouvement vers la vérité, comme le corps est le véhicule de l'être au monde. »）というような表現に改められている。だが、そこでメルロ=ポンティが言おうとしていることは、言葉と身体の違いというよりは、むしろ言葉と身体が果たす働きの類似性であり、「世界内存在」も「真理」も共に近い内容を指しているように思われる。

³ « Nous découvrons ici sous la signification conceptuelle des paroles une signification

メルロ=ポンティでは、言葉 (parole) は先立つ思惟 (pensée) を表象するのではなく、また表層的な概念だけを単に伝達するのでもなく、言葉は身体の身振りのひとつとして、そのつど「意味」を描き出している。そこで「意味」とされているものは、その人が開かれている「世界 (monde)」または、その人の「実存 (existence)」であると言える。言葉についてのこの考え方は、ブランショの言葉についての考え方と一致するのか、あるいは異なるのか。またメルロ=ポンティが言葉の「沈黙」について考えるとき、その沈黙とはどのようなものなのか。

2 ブランショにおける言葉

ブランショもまた、言葉がアプリオリなアイデアを単に翻訳するものだとは考えていない。しかしメルロ=ポンティのように言葉の意味するもの (signification) を二重構造としてとらえ、通常の意味の層と実存的な意味の層がある、というふうには考えない。言葉は現実の事物に意味を与えるが、ブランショは言葉が意味を与えるその動き自体を仔細に分析した。

まずは日常的な次元の言葉が、ブランショではどのように考えられているかについて見てみよう。さまざまな事物を指して語が発せられるとき、形而上学的な言葉観では、語はそれら事物に不変のアイデアを与えることによって、事物を表現する (représenter = 再現前させる) と考える。ブランショもメルロ=ポンティと同じように「不変のアイデア」という概念を保留にするが、語が存在者を「語の意味」で置き換えるという言葉の作用については、伝統的な考え方に同意する。ブランショによると、言葉の基本的な作用は、存在者を語の意味で置き換えることなのだ。日常的な言葉においては、語の意味は存在者の本質、つまり存在者の「存在 (être)」である。たとえば、ここにある現実の花を指して「この花」と言うとき、この言葉は現実の花自体を再現 (表現) するのではなく、現実の花をこの花の意味、つまり「存在」に置き

existentielle, qui n'est pas seulement traduite par elles, mais qui les habite et en est inséparable. » (PP, p.212)

換えることにより再現（表現）する。存在者の「存在（être）」とは、存在者を指す語の「意味」であり、イデア（idée）だ。しかしそのイデアとは、アプリオリなイデアではなく（つまり語に先立ってあらかじめある超越的イデアではなく）、発された語と共にやって来るイデアであり、発された語（＝parole）がもたらすイデアである。そしてそのイデア＝存在は現実の花に置き換わることにより、現実の花の肉体的現実（existence¹）を否定する。つまり現実の花は語によって「存在」に置き換えられることにより、際限なく変化する続ける豊かな状態にあることを否定される。

現実の花の豊かな状態、変化しつづける肉体、今ここにのみあり唯一無二であるこの花の現実を否定することが、この存在者（この花）の実存（existence）を否定することであり、その存在者を死なすことなのである。ブランショは「文学と死の権利」²というテキストの中で、「死」を与える言葉の力、殺戮の力について詳しく述べている。ブランショはそのテキストの中で「私が話すとき、私の中で死が話している³」と言っているが、それは以上のような文脈を背景にしている。ブランショにとって、言葉が与える「死」とは言葉による実存の否定を意味する。

言葉のこの否定作用は、言葉の隠れた欠陥を意味するのではない。言葉がもたらす死は、私達が日常生活を送るのに必要不可欠である。もし言葉による実存の否定と存在の立ち上がりがなければ、私達は事物を事物として捉えることができないだろう。その場合、世界は分節せず、何もなただけ様な広がりでしかなくなるだろう。それは西洋的に言えば、神々が世界を明るく

¹ メルロ＝ポンティもブランショも使っている「existence」という語は、この二人の思索家にとって異なる概念を指している。メルロ＝ポンティは「existence」という語を「être-au-monde」の類概念として用いているが、一方、ブランショは「存在（être）」との対比において「現実存在（存在者の現実）」を指す語として使っている。本稿では便宜上、両者の「existence」を「実存」と訳した。ブランショに関しては「現実に存在すること」という意味でこの訳語とする。

² La littérature et le droit à la mort, PF, pp.291-331

³ PF, p.313

する前の暗黒の闇であり、東洋的に言えば「空」だろうか。言葉が、事物の際限ない変化の広がりや意味によって分節することによってはじめて、世界は世界となり、事物は明白になり、認識と伝達が可能になるのだ。したがって事物の実存を否定し、代わりに存在（＝意味）を与える言葉のこの作用こそ、世界を生み出し、暗い地平を明るく保っているのだと言える。

ところで、仏教の悟りの境地では「色即是空¹」であるという。またサルトルは世界の確かさが不意に崩れるさまを『嘔吐』で描いた²。私達は普段、世界は明るく、事物は明白だと信じているが、一方で、その明るさを闇の中の幻想の光なのだと考えることもできる。言葉がもたらす「意味＝存在」は、見方を変えると、日常的に感じられているほど確かでも明らかでもない可能性もある。言葉による意味分節以前の、何もない一様な広がりこそが、逆に真だという考え方もできる。意味世界の確かさに対するそのような疑念は、今に始まったわけではなく、古くから人間の心に去来してきた。とはいえ、私達がもし日常生活を平穩に送ることを望むなら、とりあえず世界は世界として明るく開けている必要があるだろう。言葉がもたらす「存在」の光は、私達が世界で事物を認識し、意思を伝達するために、なくてはならないものなのだ。言葉は存在者の豊かな現実には死を与え、かわりに貧困な「意味」をもたらすが、この言葉の作用こそが日常的認識とコミュニケーションを可能にしているのである。ブランショは言う。「死がなければ、不条理の中へ、無の中へ、すべては崩れ落ちてしまうだろう³。」

メルロ＝ポンティは、言葉には通常の意味の層と、「実存的意味」の層があると考え、言葉が後者の層において、通常の意味以上に豊かに語るさまを描いた。それに対してブランショは、言葉が意味豊かに語るのではなく、事物の豊かな実存（*existence*）を否定し、その犠牲の上に貧困で明るい「意味」を作り出す点に注目した。

¹ 「般若心経」より

² Jean-Paul Sartre, *La nausée*, Gallimard, 1938

³ « Sans la mort, tout s'effondrerait dans l'absurde et dans le néant. » (*PF*, p.313)

3 ブランシヨにおける文学の言葉

さてブランシヨにおいて、日常の言葉が事物の「実存」の死の上に貧しい「意味」をもたらすならば、文学の言葉ではどうなのだろう。

文学、すなわちフィクションの言葉では、それぞれの語は現実の事物を意味で置き換えるわけではない。日常の言葉では、語は現実の事物それぞれの実存 (existence) を否定すると考えられたが、フィクションの言葉では、それぞれの語が否定すべき現実の事物がない。たとえば文学の中で「この花」という言葉が発されると、この言葉は、現実の具体的な花の実存を否定して代わりに貧困なアイデア (idée) をもたらすのではなく、現実のいかなるの花ともかかわりのないアイデア (idée) のみをもたらすのだ。文学の中で発されたこの語の意味、つまりこの語がもたらすアイデア (idée) は、現実の事物の実存すら反映していないために、不安定な内容であり、意味は意味でも「さまよう意味」となる。

それではフィクションの言葉は日常の言葉と違って、何も否定しないのだろうか。文学作品は単にさまよう意味の集まりを示すだけなのだろうか。ブランシヨは文学作品に携わる作家について次のように言っている。「彼 (= 作家) は、事物をゆっくり変化させる体系的な作業によって単にあれやこれやを否定するのではなく、一度にすべてを否定する、そして、すべてにしか関わらないので、すべてを否定することしかできないのだ¹。」ブランシヨによると、文学が否定するのはひとつひとつの事物ではなく「すべて (tout)」なのだという。またブランシヨは言う、「それ (= 作家の言語) はそれが見せるものを現前させる形で提示するのではなく、それをすべて (tout) の裏で、このすべて (tout) の意味と不在として見せることによって、提示するのだ²。」文学作品は現実の事物の実存を否定するのではなく、「すべて (tout)」

¹ « il (=l'écrivain) ne nie pas seulement ceci ou cela par le travail méthodique qui transforme lentement chaque chose, mais il nie tout, à la fois, et il ne peut que tout nier, n'ayant affaire qu'à tout. » (PF, p.308)

² « il (=le langage de l'écrivain) présente, et il ne présente pas en rendant présent ce qu'il montre, mais en le montrant derrière tout, comme le sens et l'absence de ce tout. »

を否定し、「すべて」を消し去り、その否定された「すべて」の裏側に、さまよう意味の集まりを作り上げる。それがフィクションの言葉の作用なのだ。文学が否定するこの「すべて」とは何か。

ブランショが「文学と死の権利」の中でさりげなく使っている「tout」という語は、実は漠然とした全体を意味しているのではなく、ヘルダーリンとヘーゲルに共通の思索のテーマであり、またハイデガーが「自然 (Physis)」と呼んでいるものを喚起する概念である。ブランショが考える「すべて」と「自然」の関係については、ブランショのヘルダーリン論¹の中で次のように言及されている。「自然とは全的に現前するものであり、すべて (Tout) としての現前である²。」ブランショのテキストでは、ヘルダーリンの「すべて」という語が「自然」という語に重ねられ、さらにハイデガーが「自然 (Natur, Physis)」と呼ぶものとも重ねられている。ハイデガーの「自然」という概念については『形而上学入門』³で述べられているが、要約すると「自然」とは存在が現われる場であり、そこに現われ出る存在である。ハイデガーにおいて「自然」と名付けられているものは、存在が開く場という意味で世界内存在の「世界」でもある。ブランショはこれらの事情を前提に「すべて」という用語を使っていると思われる。

文学作品が「すべて」を否定するということは、以上の文脈を考慮に入れると、文学作品が「存在全体」や「世界」を否定するということになる。そしてそれらを否定したあとに「さまよう意味」をもたらすのだ。ブランショは言っている。「それ (= 文学) は世界の彼岸にあるのではない。しかしそれはもはや世界でもない⁴。」文学作品はそもそも、言葉が指し示すものとし

(PF, p.308)

¹ La parole « sacrée » de Hölderlin, PF, pp.115-132

² « La Nature est la toute-présente, la présente comme Tout. » (PF, p.119)

³ Martin Heidegger, *Introduction à la métaphysique*, Gallimard, 1958, traduit du texte original allemand publié en 1952

⁴ « Elle (= la littérature) n'est pas au-delà du monde, mais elle n'est pas non plus le monde » (PF, p.317)

での現実の事物を欠いているが、そればかりではなく言葉のアイデアが生まれる場であるところの「世界」すら否定し、消し去る。したがって文学作品のあるところには「世界」はもはやなく、「世界」の代わりに「さまよう意味」が残される。

メルロ＝ポンティは、言葉を身振りと考え、それらは通常の意味とは別に、全体として「世界」を表現すると考えたが、この点においてブランショの言葉観はメルロ＝ポンティの言葉観と異なるように思われる。なぜならブランショによると、日常の言葉は事物の実存 (existence) を否定し、また文学の言葉は「世界」を否定するというのだから。

ブランショによると文学の言葉は「世界」を否定し、代わりに不安定な「さまよう意味」をもたらす。しかしそのことによって、不安定な意味の集まりだけが、失われた「存在」の亡霊のように漂うことになるのではない。世界が消えたあとには、言葉自体が作品としてあり、本としてある。つまり「世界＝存在」が消えた後のうつろな事物の広がりの中に、物としての文字や本が場を占めることになる。先ほど引用した文に続けてブランショは言っている。「それ(＝文学)は、世界があるより以前の事物の現前であり、世界が消えた後の事物の辛抱強さであり、すべてが消えるときに存続するものの頑固さであり、何もないうちに現われるものの当惑である¹。」さらにブランショは続ける。「文学の中では存在 (être) のない実存 (existence)、実存の形でとどまる実存が示されている²」。このようにしてブランショは、文学作品が世界 (monde = être) を否定した後に、事物の実存 (existence) としてとどまる姿を指摘している。この事物としての作品は、物としての実存を通して、私達を「世界の不在」や「存在の不確かさ」へ向かわせているように思われる。そして逆説的ではあるが、「世界の不在」や「存在の不確かさ」こそが、文学が示す「世界」の「意味」だというわけだ。

¹ « elle (= la littérature) est la présence des choses, avant que le monde ne soit, leur persévérance après que le monde a disparu, l'entêtement de ce qui subsiste quand tout s'efface et l'hébetude de ce qui apparaît quand il n'y a rien. » (PF, p.317)

² PF, p.317

ところで偶然か必然か、メルロ＝ポンティもまた芸術作品の事物性に注目していると思われる部分がある。メルロ＝ポンティにとって芸術作品は言語芸術も絵画芸術も音楽も、身体の身振りと同じく「表現 (expression)」のひとつだと考えられている。したがってメルロ＝ポンティが詩作品に言及するとき、ほかの芸術作品と並べて論じていることが多い。「一枚の絵の中で、あるいは一篇の音楽の中で、思惟 (idée) は色や音の展開を通してのみ伝達される。(…) このことは詩や小説に関しても同様である¹」、「詩はあらゆる物質的な支えから離れない。(…) 詩の意味は自由ではなく、アイデアの天空に住まうのではない。詩の意味はもろい紙の上に書かれた語の間に閉じ込められているのだ²。」このようなメルロ＝ポンティの記述を読むと、文学作品の事物性に注目したブランショに通じる場所があるように思われる。確かにメルロ＝ポンティとブランショでは、「言葉」に対する考えが異なっている。文学作品が果たす役割についても見解が異なるようだ。だが文学作品を「美」や超越的な「真理」という観点から考察する哲学的な伝統の外に、この二人の思索家が位置することは感じとることができる。文学作品の事物性に注目するということは、文学作品を不変不滅の「存在」から断ち切り、地上に引き降ろし、脆い事物のひとつにしてしまうことである。文学は天空の真理の庇護の外に追放されてしまった。たとえこの二人の思索家が、文学作品の事物性を通して別々の「意味」を見出しているとしても、この二人の一致が二十世紀半ばにおける哲学的な文学観の変容をうかがわせることには違いがない。

4 言葉の沈黙

メルロ＝ポンティとブランショは二人とも、形而上学の遺産である超越的で恒久的なアイデアから言葉 (parole) を解放し、言葉自体が持つ力に注目した。また言葉を恒久的なアイデアから解放するということは、言葉の物質性・

¹ *PP*, p.176

² *Ibid.*

事物性に目を向けることにもなった。このような共通点に加えて、この二人には冒頭で指摘した「言葉が持つ沈黙」に言及したという共通点も見受けられる。二人の思索家にとって、言葉が持つ「沈黙」とは何なのだろうか。

沈黙 (silence) とは、ラテン語の「*silentium*」という語から派生した語であり、語源的に「*se taire* (黙る、話さない)」という意味を持つ。したがって「*silence*」は、ただ単に音がなく静かな状態を示すのではなく、第一義的に「話さないこと (Fait de ne pas parler)」であり、また「自分の考えを表現しないこと (Fait de ne pas exprimer sa pensée)」でもある。言葉 (*parole*) が沈黙を持つとすると、まず第一に考えられるのは、言葉が語らない性質を持つ、ということだ。これをメルロ=ポンティの言葉観に当てはめて考えると、言葉が先立つ「*pensée*」を語らないということの意味すると考えられる。メルロ=ポンティの『シーニュ』における説明によると、「言語から原テキストという観念を追い払うと、すべての言語が非直接的、暗示的であり、沈黙であることが分かる」のだという¹。原テキスト、つまり先立つテキストに言語が追従すると考える場合、言葉は「直接的」に「*idée*」や「*pensée*」を伝えることになるが、メルロ=ポンティによると、言語は「非直接的」、「暗示的」なのであり、そのことが「沈黙」だというのである。「沈黙」と名付けたからといって、もちろんメルロ=ポンティは「言葉は何も語らない」と言いたい訳ではない。『シーニュ』には、「言語は物そのものを言うことを断念したときに、断固として言う²」という記述が見られる。おそらくメルロ=ポンティが「沈黙」と名付けているのは、言葉がアプリアイデアを「語らない」ことであり、その沈黙の中で、言葉は非直接的、暗示的に語り始めるのだろう。これまで見てきたメルロ=ポンティの言葉観を思い起こしてみると、言葉が非直接的に語るものは、言葉が身振りとして表現するところの「実存的意味」であり、ブランショに共通の語彙で言い換えるなら「世界」であると言えよう。言葉は沈黙を通して、暗示的に「世界」を語るようだ。

¹ Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960, p.54

² *Ibid.*, p.55

とすれば、この「沈黙」は「欠如」なのではなく、饒舌に「世界」を表現する「豊かな」沈黙なのではないか。この点が、貧しさや欠如と結びついたブランシヨの「沈黙」と違うところである。

ブランシヨが言う「沈黙」は、メルロ＝ポンティの「沈黙」とは違い、虚無 (néant) や空虚 (vide) と深く結びついている。まず日常の次元でブランシヨが指摘する言葉の沈黙は、言葉の「否定」作用から生み出される。ブランシヨによると、日常の言葉では語が事物の実存 (existence) を否定し、事物を不在にするのだった。「沈黙 (silence)」とは「話さない」ということなので、「言葉が事物の現実 (existence) を話さない」ということが、日常レベルの言葉の「沈黙」なのだろう。ブランシヨは以下のように説明している。

「私は話す。しかし私が言うことが、私が指示する事物のまわりに、その事物を不在にする空虚 (un vide) をつくる瞬間から、私は黙っているのだ。私は遠い不在を指示している。その不在の中にすべてが沈み、私の言葉も沈む。このようにして、語によって沈黙を作るという希望と幻想が形作られる¹⁾」

日常レベルの言葉の「沈黙」は希望であり、言葉によって目指されているものである。なぜなら言葉が事物の現実を否定すれば、そのことによって世界が開き、事物が事物となり、認識と伝達が可能になるからである。言葉が語りつつ「沈黙する」ことこそ、言葉の力であり、私達が言葉に託す光明への希望なのだ。

だが一方で、この沈黙に達することができず、しかもどこにも達することができず、何も伝えずに彷徨している言葉もある。文学の言葉だ。文学の言葉は日常の言葉と同じようには「沈黙する (=話さない)」ことが出来ない。なぜなら、そもそも「沈黙」するべき事物の実存がないからだ。ブランシヨは文学言語について、以下のように言っている。

¹⁾ PF, p.71

「到達しようとしていた沈黙の代わりに、言葉 (paroles) の切りのない繰り返しになってしまったと云って言語を非難することもできる。また、言語は実存 (existence) の中に吸収されることを望んでいたはずなのに、文学のしきたりの中に入り込んでいくと云って言語に文句を言うこともできる。たしかにそうだ。しかし内容のない語が終わりなく繰り返されること、おびただしい語を略奪しつつ言葉が続いていくこと、これこそまさに沈黙の深遠な性質なのだ、沈黙は無言の中でまで語るのであり、それは諸々の言葉の中の空虚な言葉、沈黙の中心で常に語り続けるこだまなのだ¹。」

文学においては、日常の言葉に見られる「沈黙」よりもさらに深いレベルの沈黙が、ブランショによって認められているようだ。確かによく考えてみれば、「話さない」という点で、文学の言葉ほど「話さない」言葉はない。なぜなら文学の言葉は現実の何をも表象しないので、日常の言葉よりさらに厳密に「話さない」と言えるし、また、存在であり意味である「世界」を否定するという点で、さらに純粹に何も「話さない」言葉であると言えるだろう。ブランショは『文学空間』の中で言っている。「それ (= 詩人の言語) は沈黙からやってきて、沈黙へ帰ってゆくのだ²。」徹底的に何も「話さない」、つまり超越的イデアのみならず、具体的な事物のイデアすら語らない、またアプリオリな意味のみならず、アポステリオリな意味すら語らない、文学の言葉のこの妥協なき「沈黙」は、「世界」を崩壊させるに足る「力」を持っている。文学は、無害な外見とは裏腹に、このように暴力的で革命的な「力」を内に秘めている、とブランショは考える。

5 まとめ

メルロ＝ポンティとブランショの言葉観には共通する点がいくつかあつ

¹ PF, p.320

² « il (= le langage du poète) vient du silence et il retourne au silence. »

(Maurice Blanchot, *L'espace littéraire*, Gallimard, 1955, p.38)

た。まず言葉自身に何らかのポジティブな力を見ていた点、文学作品を考える際に言葉の事物性に注目した点、そして言葉の中にある「沈黙」に言及した点が挙げられる。

それに対してこの二人の思索の相違点は、言葉自体がもつ「力」の内容に関する見解の相違だった。メルロ=ポンティにとって言葉は、身体の身振りのひとつとして、世界内存在である人間の「世界」を表現する力を持つのだった。それに対してブランショでは、言葉はそのような「世界」を崩壊させる可能性をも内に秘めた「否定の力」を持つようだ。この二人が、言葉の「沈黙」する性質に注目するとき、一方にとって「沈黙」は饒舌に「世界」を語り、他方にとって「沈黙」は「世界の不在」を暴き出す。

一体言葉は世界を築くのか、壊すのか、あるいは築きつつ、ときに亀裂を見せるのか、またあるいは、何も無いところに楼閣の幻影を映し出しているだけなのか、いずれにせよ、世界と言葉、本質と言葉が互いに深く関わり合っていることは疑いない。